

秋色
艶麗
處女七種初編中之卷

江戸 爲永春水編次

第三章

芝居見物大せんの夢 大せい 下雪 仕掛エリ。○キト道具をまる。草木
一チヤク あま葉をど多く子へねんくえんち遠よ 無仕うけざれ
「お前ヨのう織よと疏るこもとむくの子たの時分と
連月と生店の道具をも無皆をも大遠ひざ。アレ森
森ゆきとてびがきく機密の方は又ま東連の足あらざり

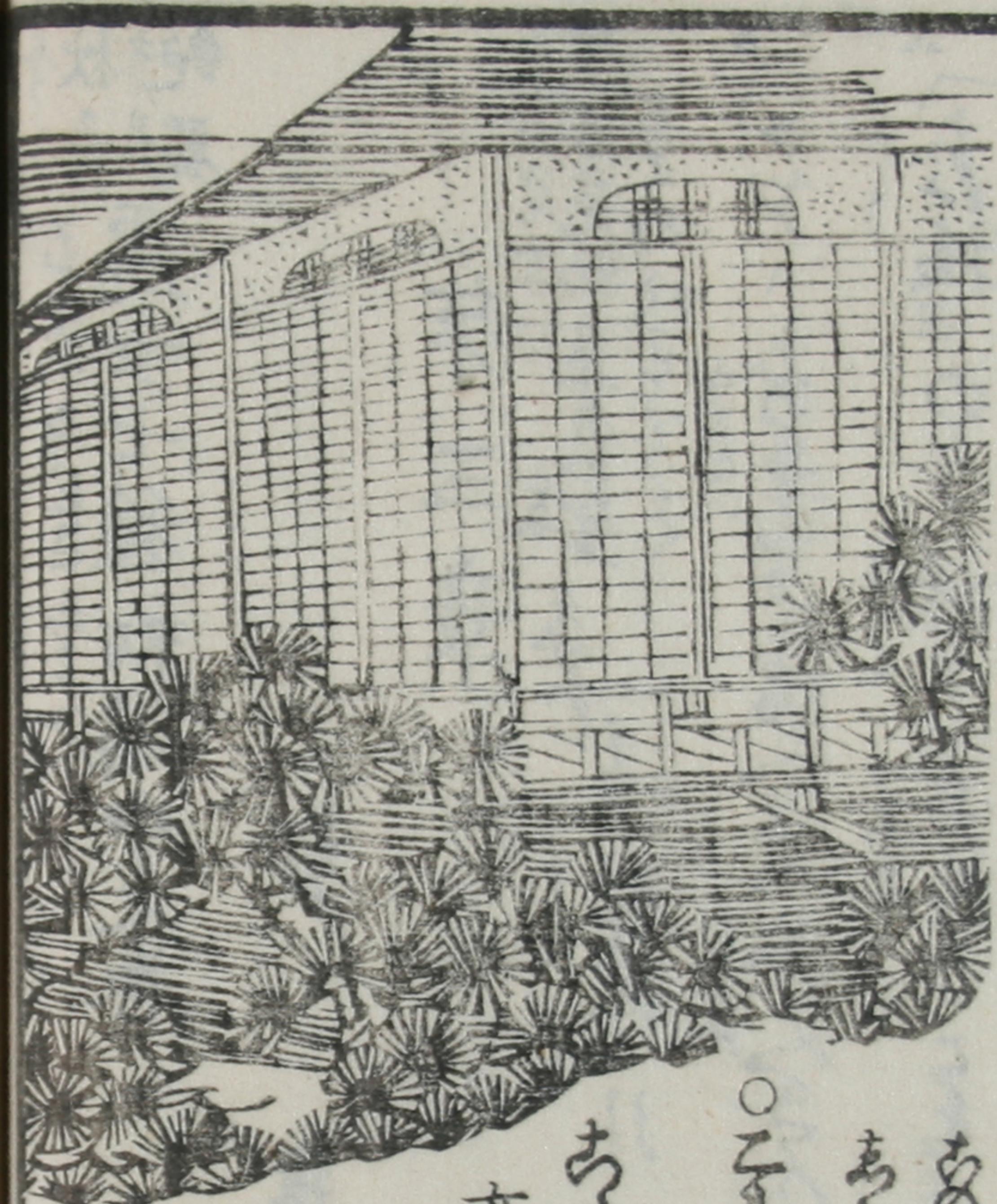
さうすうとくのう。でわく房間へ織りあがひて
おもかげんはあらざるをうめぐ
まわくまわくまわくまわく

あたたかのあたたか
ああああああああああ
こまくまくがよのうせきの
ああああああああああ

ああああああああ

「疊あくづくの疊の疊」
あまた

まみれの重ねの重ね
まみれの重ねの重ね



ばくま
おとこふをまがう

あひねふむりまく

そらもそひむきう

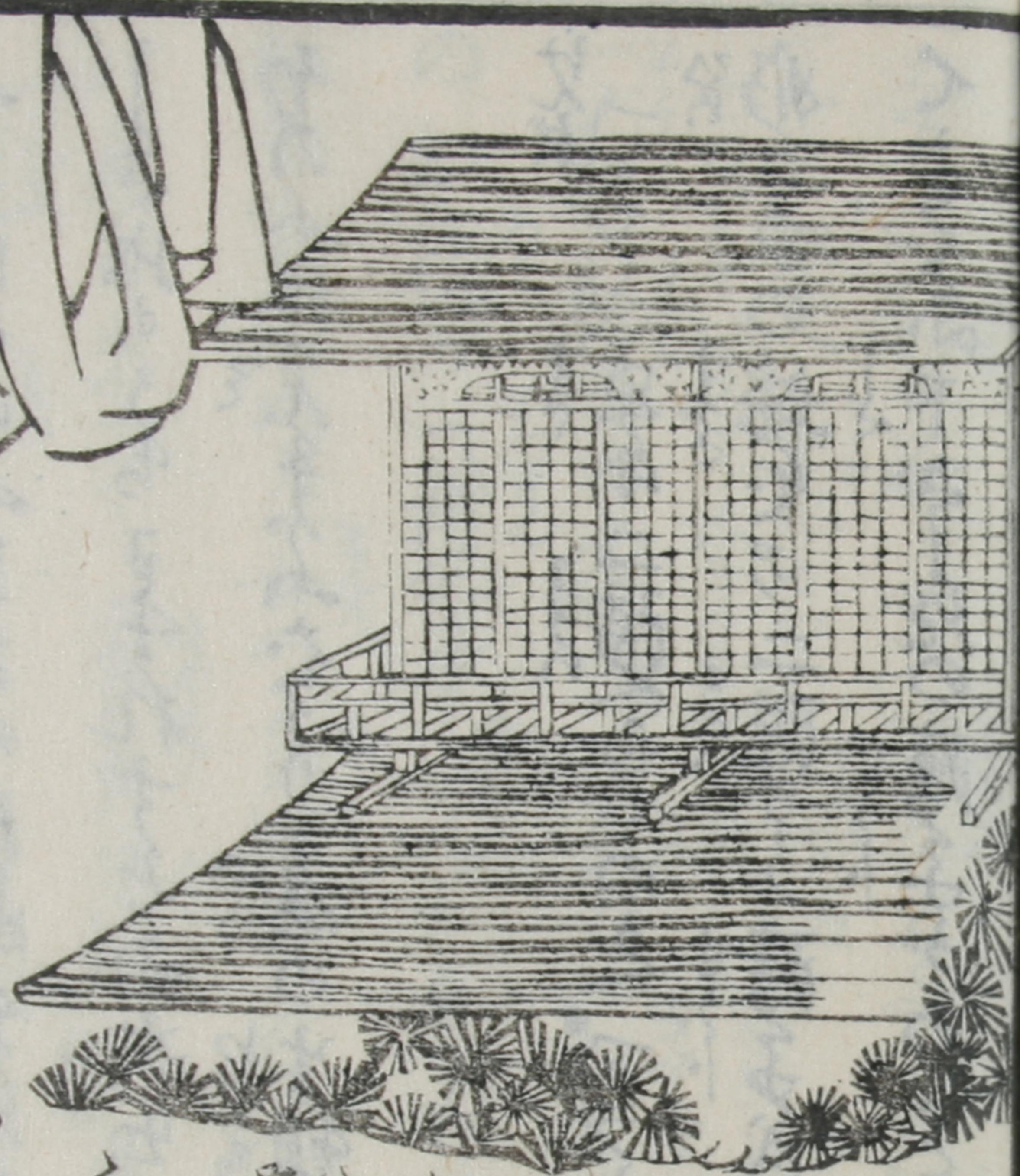
さきくめほあは見まえの

と切るくゆせよ足かく

らまくらまくやみくもく

あくびきくくく思ひぞものき

恨みだらまひどもくわく
をまくわくわくわくわく
あくわくわくわくわくわく
あくわくわくわくわくわく



姫の一喜もあらうとあくまでれぞ繁盛をあへ
あり角もまきもの風情をあらわすとさやうが心
りとめもうち里されすとふ歎かの郷ひづれ
あよにえまづだう庵の生種とまづ城東二階を

けまゆ

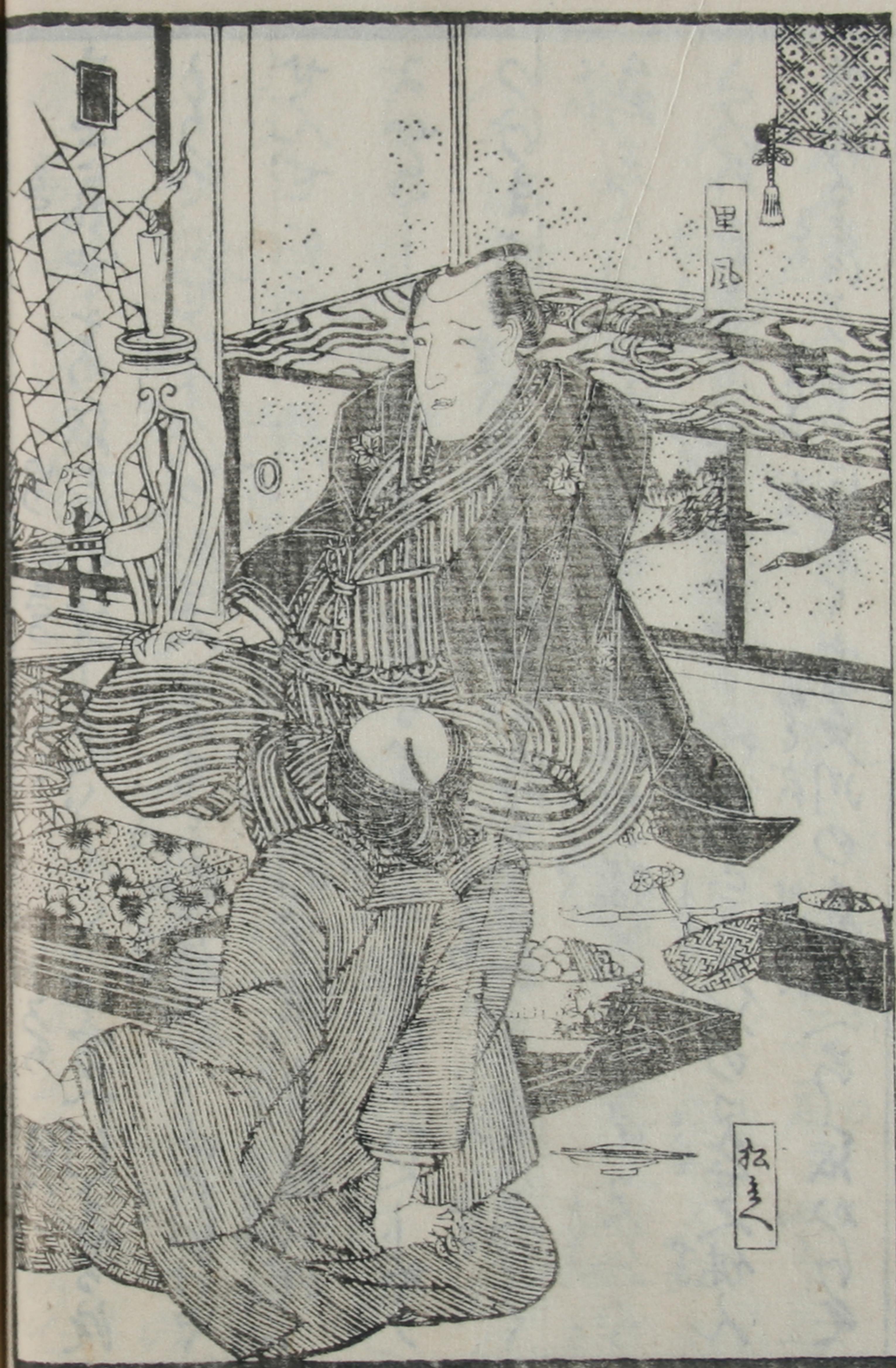
けまゆ
「やく車ふ二階 やくの之。今ア甲づくづくヨ今よか
娘の姿でアニ二階うづ階ふ成ゆけく皇と出でて足を
とまづ下ざれの隣子がわと只きみ毅を生す所よ

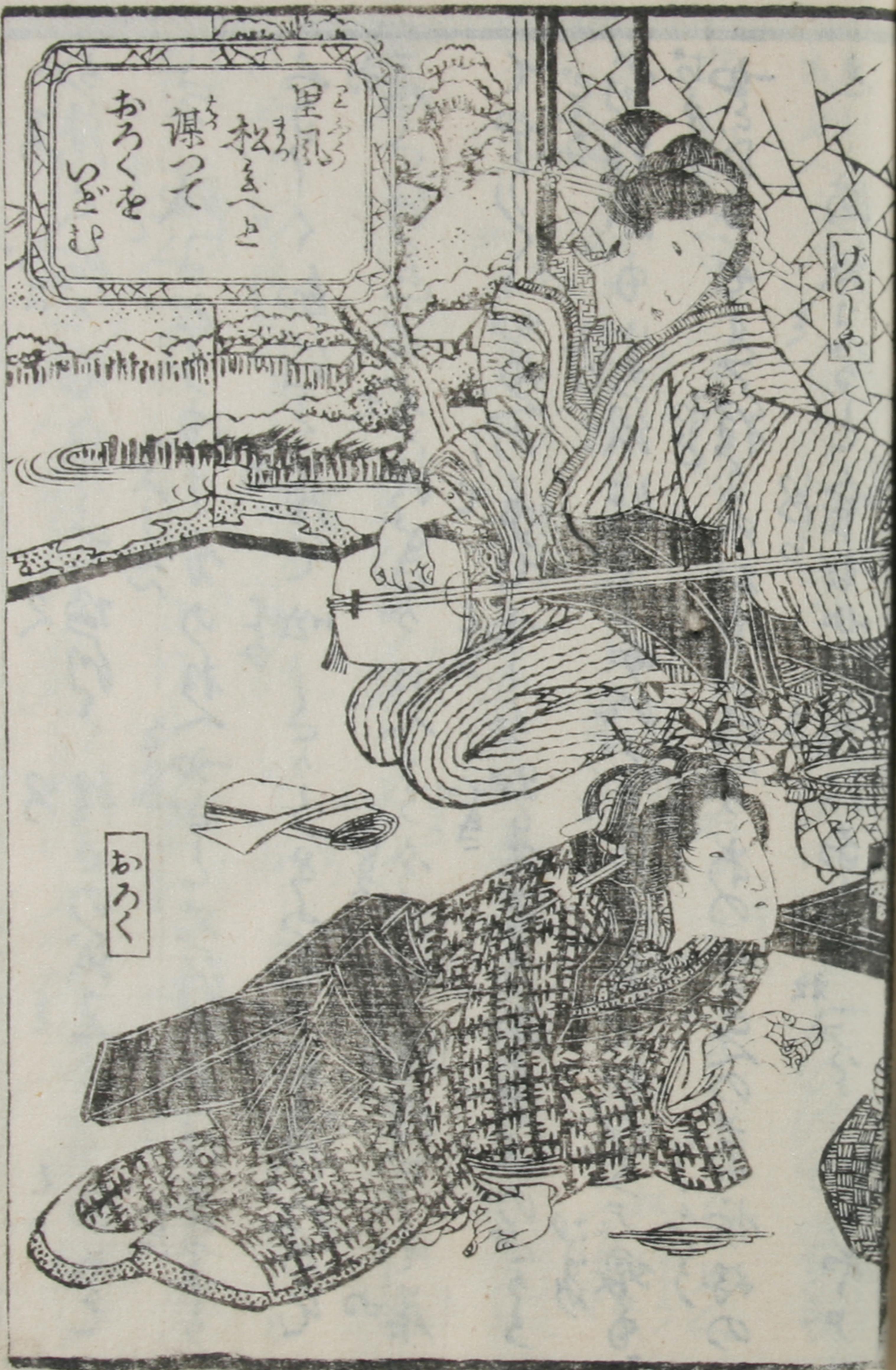
ああへおまえアモウ はぢてそぞくかわヨ さゞれをひのま
すまくかをま
すのねえと宣風とのよが御船ね
正モシ且取今の大賀場場所に
トカニモサクシテおまえ
一ノ子で勤ま^{つあ}せ 里「茶だん極^{きわ}みきの」 ね「ナニサ例^{たと}のねを
のむ程^くづ一例^じでサ 里「ハテナキアヤドヨリすゞじ ねイエ
もまく見えハアノ女^めの丸^まみかわ^かをまがく私^{わたくし}のまご
け望^{まね}どある 窓^{まど}あ口^{くち}とまく出^で来^るあやせんアモシ
福^{ふく}沢^{さわ}の喜^{よし}えとひのぶ勝^{かつ}てどせんまん久^{ひさ}き別^{べつ}
ちモア居^ゐけまどテクホ泡^{いり}と云^いか^いわくも遠^{とお}れ
カ

とひよるをひらひらと葉の二物めで厚くやうと
えりゆきにあはれぬまへてはりかみ
がくとくわらひんとくさの公
人をもとめ考へ被もゆよ理ととても情
ありてあはれぬ娘と支那みさづくゑひはり
とひよるをひらひらと葉の二物めで厚くやうと
えりゆきにあはれぬまへてはりかみ
がくとくわらひんとくさの公

里風

松主





ち身と何もあらず角の縁の外見のがやめと
さとよがれよどきもや分のわくかざとやうてお経よせう
かくまくお山の届てゆくへりやまともひつゆく
てゆきゆきとあはげりがゆくゆくゆきを年齋と居
てゆくちかくの身をせしむが出来そよあひのど
じえみじ
じゆくねふゆ実成はくゆくどくのゆのうちあはア娘も
ぢまくやくゆく程ゆくありのれがおのほどの年齋好の
ゆきゆきとくもゆきにあがぜ
れ

あやえのをくわがまがちの後どりのて寝る
ゲのとまへうほーくちくらちやア達ひもあさりめ
里へそりやア左ねサあー余程い女トヤア歎ウ左ねサ
マニ丁町八町の写すれぞうせんすあお粉が
すがひく脛けとども茶が差ひくむをえのをも
少やアのまくと右ひまくとひく折りも彼か縁へ跡か
よまきまくはりどもひまく多款の写れきさがる憂
しき
あまくと左脣へ奉まくあまくにまへひくと神
め

相云セヨモアラジハルニシヨモサシノ御事の幕江口車

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ舞春の御事がニ階ノ佛殿ノ也子をみちあた

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

トヨモ

たまふうみと物の如クワアルタ

こくさ
により

トコトガバ
○あわ

風骨烈死鷺春若鳥

才二編同秋色艶舞娘女種二五圖

えき

やうやく

と冊子の赤城一毛新板西之手新

あひのうのどもござれいれすまつ

お猪へあ森山深山入をりまし

（あとまざくま

ものみにとてちねり

チヨレ

きどあらく
憂愁哀樂の一世界効美懲惡一日にまづ今日にと

え



きりとおひごとく大鼓のまゝドヤードコドンとどく 実にうき
まゝくあめくはまくぐく 別とゆくまめれをまきぬぐの
ちひ成うるなまやましきみわの夜のたむ縁をまく
まく廣より被松まよと里風よつまうれ送りまく車よ
か緑の窓で玉き雲をもうとあたのことを雪としえ
まきも落ともみてうし合ふまくことがめへてまくちかくれ
ト女ちまう「あや」ちまうふた筋すすくまくまくね
う「まく幕うほくまくととぞよあらまちやアいづア

二階へ駆け上りつけなサア皆さんマア二階へお入ります

えへん駆け上りてあはよ二階へあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

えへん駆け上りてあはヨア、左翁

とまつら。あちやで
まつたまんねんかアソム お通さん東洋初音
わざ あ内をあはばづきへりもくさみゆ湯也 ねうそ
五ぞく まつうてやどるくらうのだもあらくゆ
カア まつうてやどるくらうのだもあらくゆ
アア ちむすませう 幸ちく今見とまがわーとまく
か か か
居うせうごくまがえとまくつげはりのやひき ざくア
一ツ ちあぐんきせくとまく ま あらう
ざく ま あらう
あぐん 国形へあげてもくれ ナチ あく まく
あく まく
ゆうまわ込ゲ多ヒ白紙もと少角が まくまんヨ
とま まく
ものかよしのい第ひ部でこまくを男と迷ふせじゆく

まよひせんとき
一方みす金持カタキミ トナホミ えどご清教セイキョウ ありて へぢまん帰カム
むづう 美アメめぞく和の薬教ヤクヨウ ありて あくよまアカルヨマ 师シ宿ス
ぎよそく 薬教ヤクヨウ の 康カニ福ラク ある どきも 完ふハラフ びとやわヒトヤワ
あくよひ みがゆミガユ と 情ヨメげく もようち 薬教ヤクヨウ が うざれウザレ 事モノ
が うちウチ あきらアキラ ト ナホミ テテ ト おがよどれヨドレ あくよまアクヨマ
らうひ 薬教ヤクヨウ ねネ ト わくワク ト ひねヒネ くごヨ 和の見ミ
が もす いっイツ と 一 独ハタチ 薬教ヤクヨウ の はゆうハヤウ で 居リ みの はハ
チヤチヤ あぐ降アグダ 来カム ト やア移アシタシ ト ナヤナヤ いとよひの 月ツキ

ハク「あらがう御生むみがくと
りと物おりへあまくら物語りゆきのさうのとく
りぞくごさのません」

「うはくよの成てて度て物語り
ちり見てありうるも極くも見取
えみ里」「イヤく逃出さうとすもあ

「うがうがうきくとくをかずるわあまくらへ」「チャくあんみマア弓
をのとをのとヨモれみるととせぬあらもくまくとお
とちぬ一やくくとくません」

「おれ
のうつよ
コラシメリ

○鳴蝉 法事のちうづくと他凡よもよる
ことよそとさあぐきゆ中にとりそまや和寫の
みのむすめあつてあ
内を娘わど勅あまし法事へあらきぐれり

第四章

ま
住つぬ旅のこえや重巨體のあひよーちねがむあや
角約成のあが樂とくじこ軍事もあきかの其もう
あひの嘗つよくもまじれ不遠く経て再會あひゆ
來る日もあまくすく煙主の財ふも賣月ぞうんあの

身代り人もゆくとこそあまんや雲づかる那若とすとも
らひゆる一春みておはか一昇ねのびり萬古よめふう合
きわむるの娘めい成なあとまくゑもゆも跡あととと
ちりあくびいをいまいすすも窓まどて熟じひひまくせんさうさうとと望ぼうよよ
あけくを仰あうともありくよ放ほーとおはくはくゆもせまま
幸さいひひじじとと幸さいむむ活業がくぎょうの運うんすすと物ものの力ぢふふあ
松子まつこされば象肉じやくにくと清きよよ粒こずれのを在あ細ほく残のこて旅たび
主ぬしささだだぬぬああままと思おもふ城室じゆしつああ今いまも

猪の巣をかこむと、一間の巨柱の中
にありて、理成りよせ終の事と云ふもそれ
より猪の用事ともひそやく廻る猪のゆゑ成りち
あへ
合せ、金所のぐらりと、人のゆすわへきとあ
その夜の所方に、あれど、おのれの心で、
筆の舌の筋すらぬけの貯よゑの筋、隠すて彼
御室の姫子、いはばおの成程、隠して、國かと
ちよよ通ひ、娘もゆゑて、かくに支那とありとどり

嘗ての家家の娘と小基と和合して多分へ暮春と云
ゆふと申すよあつてうりよく數をちれまつてむかえ
ゆふとも娘とさあうきまうき家よづぎひそくぶ
極めぬる氣くどきのあよ鶴邊あらむきとしきの渡
所へいはゆのゆう今宵のゆう浦をぬるを盡巨船
ゆきせうド
表の隣あずへ着くはくさもむちますきをひむか
はるの拂ふると沙引みじや遠くあく出するもあ
て多くとひごとくせやう内波障す紙絨とぬじて完能

情とさへ想けばさもつふ老の娘より、た家の徳と祇室を
の唄女え東化粧の本元まで十人程の女でも粧のと
す
あでう波ノき紙千枚はゆけるゆきと是へ拂はし
あ個の娘人かよひみ面トとよそもひて體ノ男の
右なり腰ノ巨體と押合て筋がヨリノび揺らむぞる
中ノ柳ら其をまどもとへるびく風さむを速弓絃い
よ蒲をまくかのほよ草のかまうてをうとともゑ
その風情と音よりあゆらうち坤く憲成のあづて

かわく游アマシみと近アマシとせアマシ がまアマシを替アマシ一アマシとこアマシうとく 精アマシもアマシ
がアマシべ 小アマシ妻アマシへおアマシトアマシおアマシ新アマシのアマシ娘アマシち歌アマシよ向アマシひ 小アマシへアマシおアマシ誠アマシさん
かアマシつアマシいアマシの成アマシやす様アマシづ子アマシ 私アマシもアマシうアマシかとアマシりてアマシうアマシかまアマシ
先アマシもアマシ妻アマシせびアマシよ行アマシくアマシかアマシきアマシねアマシでアマシを歌アマシるアマシ「アマシやめアマシよ
とアマシアレサ他アマシトアマシよアマシひアマシまアマシ日アマシ歌アマシえアマシどアマシきアマシえアマシの情アマシ人アマシよ
まアマシまアマシまアマシみアマシもアマシうアマシとアマシかアマシきアマシせアマシきアマシのキアマシまアマシよ
らアマシ成アマシちアマシひアマシとアマシあアマシよアマシおアマシとアマシうアマシとアマシあアマシにアマシ
らアマシまアマシまアマシみアマシのアマシまアマシとアマシまアマシもアマシのアマシウアマシ私アマシアアマシ要アマシでアマシおアマシいアマシま

生ヨ 小アレサ彩ヅミツまくち黒マツアラモトアラモト後アフタモ

うきいヨ

多數の女中ウミダの御使ガシもあつてこそあれとも
臣妾ミツラのひ女ヒメよきとくをまこと重役シカクの張等ハタケ
おへその御ミツラの御使ガシもあつてこそあれとも
多くん近チカニ素スル儀ギが 倍ハナりて人情ヒンセイもて萬世マニセイの如シテ
戸初ヒトシは彼カミの狼ヤマ山ヤマを家ヤマへよも足シテ入スルる
ひく生ヒクシまく地ジ御ミツラき羊ヒツジよ他王カミの方カミをある

まよひく人情のあらわせむれをのづき
うそううそすううそすううそすううそすう
別て心晴の筆へまづの秋深ゆくうれきの
ちまき

物とあまび一

やマアおまへがゆまつたまつてあつてあつて
きききききききききききききききききき

トニ。





あく
かく
めぐ
めぐら
めぐらす
めぐらす

かのじ
のじ
のじ



ふとん

さうざれ

片

吾あわゑるごト 陸離の庸事へ接觸せば抑おもてりひ

さうご善きもの初と見まじが甚き者へ巨體へ傍かまそ

まやくと轟き風情うう 「わ參さんち寶ヨ縁くりよ

りの寄あわざくまきわよ私やア甚きえよが殊も懶

やア仕るかのう 「そくに而夙懶是とのぞく 「ナニテ

金舟をぶめりまつまよせく滞ちとひよ子が初のうだを

のれうう 緒よモテく物まく善きものもの紙日本一と

りうと

えべづ

まとう

す

ゆき

りよ好漢ごまゆま御坐ひがまく亂でぶりも堅強

み

東

日

まき

ゆ

「竹が勝つ」の理が可らず、形へ織よモウあ細きも

人いざりを重ねと見ゆるがまひどき

いのち
金が法う終へア今夜、じきくざる宵よ藤也

てえねトりのまがまにかくと例も、「そまく

後ひむ龜」の「そまくまよその藤君とひよ娘が私

よまくさんとあわてゝすまるとむしら私のも駄えの

まうまくと易いは今よゑむすめも藤君さんがお家

よ連られても多く往くまことにまえがちやじよざ

まう私一人はも呼よみあひうち御事よひとらへてま
まうきとよをよめねが朝もくみサリアベシトアノウソ
リヌキモ因形えん私ノヤア半身にか一む駄ひがどき
りまんがせとくさとまとうとたまうとまえ
トモウ駄ひがせとくさとまとうとまえ
すまく駄ひがせとくさとまとうとまえ
あるとまとうとまえ
あるとまとうとまえ
でもかきくちとおひじりうねうちふきよまくらとい
けまともたくまちあらやア因ルわゆがつとまくらえ

おのづか
居てゐるよなあと思ひ立つた
でも望つさえふむかせぬやうな事はあ
まうちうまい
おれが身をさすと身體にも見えも見え
よかの御城の巨體がゆく「アあ智ヨヤミシゲハ勝ど
ら富あゆ
わくあくと湖一泊とてひ
マ蛇穴をかきこまく手筋が成程ア一様よ勝利する
男の勇をさも尋ねよう也」とさう思ひ立つた
とゆう
少しあの顔へあればさうして「あくまつての爲へ

うへ新と邊の事は見聞さうと見え
かあらざん 一トヤくは見ゆる事あらすかまくとも
さんのが先の晴ぐのも綠さんよ
景物すらもすくに景がりゆくじく物がとどきなざ
ウヘ雲がちゆね 一トヤく家を出で
ようち先の仕事と出でて成ることちゆせむ 一トヤくあれどけふ
字がけくち物とすゑてねがすゑえ物でもお
まく見えよ御もちさせたまはれぬ事と
おも

まほごよ身を以て云ひまへよとまでもあらへじちようひ
おもうちあゆ野ので由那いなで由那いな得ひひしをわくとせけふ
ろく移シテ身みうちあ鐵てつと本もと皮かわりとせけふ
ひと身みの身みが萬まん毛けと二級にき紙し裏うらをわ鐵てつ
ね身みよ身みの仕事わざせしとされば初はじのうに。よよと
向むかのまほぐへ使つかのまほくと身みの相成あがり
よ身みあきらをかすもとせけふと

まよひをかねてあそぶふらはうか
かまくらのまほとあそぶのもす

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

おもいのまごはるいともうらわ

もまきえへ織ちせんのひ成多とまくとまく入のぢま
ありませうち新ゆ織きえよひるゆ中まうをまくとま
りとくまちと類まれて居まきとヨトりゆくま
のむりうちふるゆりむれども身のゆうゆく一イタ
松まきまぐくまくまく松くらとへ織舌がいと
しゆくあくう西ふるもくらむくらまくらのあよ女の
新成多くも織舌くアサ呂物ぐきくまくまくのく
火ちくもまづつる火舌とつる火あよぶるせ男り

まへて力のぬけきりぬかとひふと
せう和がかせうねとしきざやアカウホト
ねマア竹トヨシ舞にトかくはさみトねうまトヨ
春よ例トも緑トぬくとあくとほゆトあ
身トの髪トよかどりトも四ト道トと見えトばせトよ
那麻トせせうめうり